

三つの文化と二つの宗教が重なる エジプトの精神性

今日のテーマにあります「聖家族のエジプト避難の旅」は、時代的にはたいへん古い話です。これが現代においてどういう意味をもつのかを、とくに平和の視点から考えてみたいと思います。

私は今年の2月半ばから3月半ばにかけて、カイロ大学文学部日本学科へ教えにいつておりました。エジプトに見られる一神教を中心とする考え方に対し、日本には「和」の文化といえますか、多様性を背景にもつ世界観があります。この発想のまったく違う両地域を対話させる必要があるのではないか。それが、私が毎年エジプトに通う理由なのです。

現在のエジプトは2011年に革命を起こした後で、まだ落ち着いておりません。モルシ大統領はいろいろ約束はしますが、それらはなかなか実行されない。エジプト政府は国をどう建て直していけばいいのかを、なかなか見つけられないでいます。そこに国民は不満をもっている。政治集会は、今も盛んに行われていると思います。

レクチャー

CISMOR 公開講演会

真の平和を実現していくために

—コプトが伝える聖家族のエジプト避難の旅と
イスラームの聖遷(ヒジュラ)を通して考える—

カイロ大学文学部客員教授 久山宗彦氏



かつて笠信太郎という方が「ものの見方」という本を書かれました。イギリス人は歩きながら考える、ドイツ人はよく考えてからゆつくり歩き出す、フランス人は考えた後で走り出す、スペイン人は行動してから考える。そのようなことを書いておられましたが、これを今の日本学科のエジプト人学生たちに話したところ、彼らはこう言いました。エジプトの今回の革命は「アラブ・スプリング」などと呼ばれていますが、エジプトで「春」というのはよろしくない季節であると。春は砂嵐が吹く季節。将来に向けて何かを生み出していくという意味は、向こうではあまり感じられないそうです。

エジプトの若い人にとつて、「革命(サウラ)とはまず「壊す」ことが大事だ」という意識が強い。壊した後、新しいものを創造していくためには頭を柔軟にする必要があります。イスラーム的発想を大切にした上で、日本のような多様性を和でつなげていくという発想を、彼らがどんどん勉強していくてほしい。これは向この学科長や学生たちの考えでもありません。このようなことに少しでも力になりたいと思っていますので、私はエジプト

と日本の間を行き来しているわけだ。

エジプトの文化は伝統を非常に大切にしています。現在エジプトはイスラム国ですが、人口の十数パーセントはコプト教徒です。宗教的視点で見ると、長いフアラオニックの時代があり、「聖家族の避難」があり、福音書を書いた聖マルコが宣教を行っていきました。この時マルコが現在のアレクサンドリアに建てた教会が、今のコプト教会の起源です。当時、コプト教はエジプト全体の宗教になっていきましたが、そこへ7世紀になってイスラムが入ってくる。これら3層の宗教文化が重ねられているのがエジプトです。

例えばルクソールにあるカルナック神殿には、十字架上の像のように見える神の像があります。ここには左右にもう1体ずつあったらしく、三位一体の神を想起して、コプト教徒がこの像の前でミサをあげたと言われています。直ぐ近くの神殿の柱の上部には聖母マリア、聖ヨゼフのイコンが描かれています。フアラオニックの時代の上にキリスト教を刻んでいくという発想です。そしてルクソール神殿のすぐ横には以前よりモスクが造られました。日本でもこういうところを見

習っていけばいいのではないかと思えます。

エジプトにおける コプトとイスラムの関係

エジプトの場合、基本的にコプトとイスラムは一体です。宗教は違いますが、そこに違和感があるとはちょっと考えにくい。2年前の革命当時、ナイル川の橋の上はタハリール広場へ移動する人の群れで埋め尽くされていました。人々は十字架とクルアーンを互いにかざしていました。イスラムの象徴である新月と、キリスト教の十字架を一緒に描いたマークを持つ人もいました。タハリール広場でイスラム教徒が祈る時は、邪魔が入らないよう、コプト教徒たちが人間の鎖をつくって守ってあげていました。「イスラム教徒でありコプト教徒であるエジプト人はテロリズムと対決する」というような言葉も見られました。表現はいろいろでしたが、これらはすべて、キリスト教徒とイスラム教徒が隣り合っている、一体となっているという意味ですね。

その背景には何があるのでしょうか。聖家族のエジプト避難については、クル

アーンにその記述があります。「次に、我ら（アッラーご自身のこと）マルヤム（聖母マリア）の子（イエス）とその母親（マリア）とを神兆となし、二人の安全のために隠れた場として平地と泉水のある丘を与えた」（信ずる人々の章23:50）。この場所はほとんどの研究者によって、エジプトのパハナサーであるという見解で一致しています。ここで聖家族は憩いの場を求め、木の下で休まれたのでした。この木は「マリアの木」（シヤガレト・マルヤム）と呼ばれ、同じ名で呼ばれる木は現在エジプトの各地にあります。一番有名なのはカイロの北、マタレイヤにある木です。たいていの場合は泉（井戸）も一緒にあります。パハナサーもそうです。このようにクルアーンにも描かれているということで、イスラムの人たちにも、聖家族の避難の旅は認められているのです。

ところで、イスラムのヒジュラは622年です。ムハンマドと弟子たちが迫害に遭い、マッカ（メッカ）での布教を断念し、マディーナへ移動していった。これが聖遷（ヒジュラ）と呼ばれています。実質的にイスラムが生かされていった非

常に大きな意義ある時期で、イスラムの原点であり、元年です。このヒジュラを通して、イスラムの人にとって聖家族の避難の旅は、イスラムという宗教にも重なると言えるのではないか。私はキリスト教的立場からそう考えています。どちらの旅も非常に大きな問題を我々に提示しているのではないかと思っています。

報復の論理が生む 新たな対立の構図

聖家族避難の旅とヒジュラが重なり合うとは、どういうことなのか。古代エジプトから始まった歴史的なつながりの中で、これを考えてみたいと思います。

私がここで問題にしたいのは「本当の平和」ということです。現在は平和を口にしながら、とくに政治色の濃い世界においては相手を斬っていく、懲らしめていくという考え方が横行しているのでは

ないでしょうか。私は現在、世界で最も深刻な問題はイスラムの原理主義的な考え方、ワハビズムとキリスト教福音派の原理主義の両者の非常に政治的な色彩を帯びての敵対であると思っています。9・11あたりから、この対立は考えられます。欧米的な考え方からすると、彼らのイスラム的な考え方には非常に違和感があった。イスラムの立場からすると、欧米が湾岸に介入し、アフガニスタンでの衝突、イラク危機があった。かつての冷戦構造が改まり、今度は欧米のキリスト教世界とイスラム世界が対立していくような状況が、非常にクローズアップされてきています。

このような場合、たいてい問題になるのは、やつつけられた方が報復をしていくことです。その報復の論理を基礎づけているのは、旧約聖書の申命記や出エジプト記であると思います。「あなたの目

はその人に憐れみをかけてはいけな。命に命、目には目、歯には歯、手には手足には足をもって償わせなければならぬ」（申命記19:21）。非常に有名な言葉ですね。出エジプト記にも同じことが書かれており、「傷口は傷口で償わなければならぬ」とも書いてある。こういう報復的な考え方が当然、両世界の対立にはつきものです。宗教が関係すると、報復の論理によって人はどんどん命を失っていきました。

「汝の敵を赦しなさい」

もちろん報復の論理については、自分の尊厳の回復という意味が旧約聖書にははつきりとあります。しかしこういう旧約聖書の記述を克服・完成させたのは、キリスト・イエスですね。新約聖書を見ると、報復の論理はどこにも出てきません。むしろ報復とは正反対の言葉が出てくる。自分に対して悪行を働く相手を赦す。敵を愛し、敵を赦しなさいというイエスの言葉がありますが、キリスト・イエスは言葉だけでなく、身をもって彼の生涯の中で、随所にその姿勢をお見せになった。つまり人間にまで成り下がって

略歴 久山 宗彦（くやま・むねひこ）氏

1939年生まれ。東北大学大学院修士（文学修士）、名誉博士（文化学）。法政大学教授を経て、星美学園短期大学学長、カリタス女子短期大学学長を歴任、現カイロ大学文学部日本語日本文学科客員教授。専攻は宗教学。著書に『イスラム世界とコプト文化』（コルベ出版社、1982年）、「ナイル河畔の聖家族」（フットワーク出版、1991年）、「コーラン」と聖書の対話（講談社・現代新書、1993年）など多数。



いらつしゃって、幼子の段階でエジプトへ避難して、最期は罪を犯したわけでもないのに十字架に磔になった。神の子ですから悪い者を懲らしめたり報復したりおできになったと思います。が、キリスト・イエスは一度たりともそういうことをなさいませんでした。

例えばインドのガンジーは、「汝の敵を赦しなさい、愛しなさい」ということをインドの英国人キリスト教徒から教わったといいますが、「敵を愛する」など、これは人間にはできない、神にしかできない。まして、十字架上でまさに死に直面している時にイエスが「この人たちは何をしているのか分かっていない。この人たちは赦してあげてほしい」という言葉を父なる神に吐かれる。そのことを知って、イエス・キリストは

神の子であるとガンジーは悟ったと、どこかの本に書いてありました。ただ自分の周りの英国人を見て「皆クリスチャンのだけれど、本当のクリスチャンはいなかった」とまでガンジーは語っています。

このようなキリスト・イエスの、報復の論理とはまるで逆の「汝の敵を赦しなさい」という考えは、実はエジプトのキリスト教コプトの一番根幹にあるものです。コプトはそこを非常に大事にしていく宗教なのです。

キリスト教の「主の祈り」の中にも「我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ」という一節があります。とくに平和の問題とからめて、このことは非常に深い意味をもっているのではないのでしょうか。

そういうイエスの生き方がコプトの土台なのです。聖家族のエジプト避難の旅の理由も、この「汝の敵を赦す、愛する」ことと、ベースでは非常に関係しているのではないかと私は思っています。聖家族のエジプト避難が根底にあるからこそ、厳しい迫害にも打ち勝って、コプトは現在に至るまで存続してきているのではな

いでしょか。

聖家族避難の旅に見出す特別な意味

聖家族のエジプト避難の旅の、直接的な理由は聖書に出てまいります。神の子が生まれたという噂をヘロデ王が聞くことになった。幼児のうちに殺してしまわないと自分の地位が危ないということでエルサレムの幼児たちがたくさん殺された。その中にイエスもいる筈だとヘロデは思ったのでしたが、エジプトへ避難しなさいという天使のお告げをヨゼフが聞いて、幼児の殺害事件がある前に彼らは既にエジプトへの避難の旅に出かけておりました。

旅のルートを改めて見てみましょう。聖家族はベトレヘムからエジプトへやってきて、ザアジー、テル・バスタ、サマンヌド、サハー、カイロ、マタレイヤへと南下し、マアディーから船でナイルを下ります。そしてパハナサー、サマルート、鳥の山、アスユートへ。ここから10キロくらいの岩山にドルンカという場所があり、ここが聖家族避難の旅の南限説の一つとされています。少し北



聖家族のエジプト避難の旅のルート

のクーセイヤで旅は終わったのではという説もあります。ところで聖家族が歩かれた、例えば、カイロのザイトゥーンという場所にもコプト教会がありますが、聖家族はここにあった泉の水（現在は井戸水）を飲んだと言われています。避難の旅とは、水を

求め、洞穴のような隠れ家を探す旅であったと言われています。もちろんローマの兵士からも追われておりました。それを避けて夜間に移動しておられたのです。オールド・カイロにあるアブ・セルガ教会は、聖家族の一時の隠れ家となっていた宿の上に立っています。聖家族の避

難の旅で最も有名な所になっていて、欧米の巡礼者がカイロへ来ると必ず訪れる聖地です。ところで、旅の南限ドルンカ修院にある聖堂には「洞穴の教会」という名がついています。ここに聖家族は長い間留まり、それから再び天使によるお告げがあつて、パレスチナの方へ戻つていったのでした。

この避難の旅には、一つ大きな意味がありました。先ほども申しあげたように、キリスト・イエスは神の子であるわけですから、ヘロデ王に対してどんなことでもできたでしょう。しかし、イエスと聖家族は避難という道を選択された。さて、われわれが迫害に遭つたとき、どんな方法を取るでしょうか。多くの人は対抗する。何とか、かわす形で抵抗もあるでしょう。しかし聖家族がとつた姿勢は能動的な「反―抵抗」と言えるのではなかったでしょうか？ 積極的に「反―抵抗」「反―敵対」という態度をとられたとはつきり言えると思います。これは一貫してキリスト・イエスのとられた姿勢です。現在エジプト人口の十数パーセントに留まるコプト教徒も、この精神をもつてイスラムの中でそれ相応に分をわきまえて

生きています。これもキリスト・イエスの姿勢に通じると言えるでしょう。

避難先にエジプトを選んだ理由には、キリスト教が世界に伝わっていくために異教国エジプトが選ばれたということもあつたでしょうし、偶像崇拜国エジプトに、目に見えない神様の祭壇をつくるという意味もあつたでしょう。コプトの聖伝には、アシュムーナインのトト神殿を聖家族が訪ねていると神殿の偶像が真つ二つに割れたという記述もあります。「悪玉とみなした相手をやつつけることにより平和がやってくると信じる為政者との比較」という意味もあつたでしょう。現在もよく見られる、こういう為政者たちと聖家族のとつた態度を比較することは非常に大きな意味があると思います。

ムハンマドの聖遷は 最善のジハードだった

ところでムハンマドが神から啓示を受けた当時、アラビア半島は宗教的、社会的など、いろんな面で混乱した時代でした。一番問題だつたのは偶像崇拜です。多神教に関わっている人たちが非常に多

く目ついたのです。旧約・新約聖書の精神に戻りたいと思つたムハンマドは、神様との出会いによって偶像をたたき壊していったアブラハムにならない、多神教の巢窟であつたカーバ神殿の偶像をたたき壊していったのです。そして人々の宗教的な面を立て直す必要性があつたのですが、アラビア半島の人たちがよく分かるアラビア語でクルアーンが記されたのは幸いでした。

偶像崇拜を否定したムハンマドは当時、多神教の地マッカで激しい迫害を受けることになりました。カーバ神殿の責任者がユダヤ人と結託して彼を殺そうとする計画もありました。そこで、もともとユダヤ人が住んでいたヤスリブという町のちのマディーナへ、アッラーの意向に添つて難を逃れて仲間たちと移動したのです。敵対者の多いマッカではムハンマドたちの生活が成り立たない。イスラムとしての自立を目指して、積極的にマディーナへ引越す道をムハンマドはとつたのでした。それがヒジュラです。

それはジハードの一つの重要な形としての、「平和をつくり出す」聖遷でした。ジハードはイスラムの第6番目の柱と言

われています。「ジハード＝聖戦」という一つだけの捉え方は間違いです。ジハードとはアッラーのために努力して、いたらないところを変えていくこと。すべては神様のため、イスラム共同体のため、そのための努力をすることを意味しています。一番大事なことは相手と直接的に戦うのではなく、聖家族のエジプト避難のような「反―抵抗」「反―敵対」です。基本的に両者は一致していると私は思うのです。

クルアーンの「女の章」にはこう書いてあります。「われとわが身に害なしているところ（具体的にはムハンマドと共にマッカを去つてマディーナに移住することを肯せず、不信の徒の間に安閑として暮らすことを好んだ人々を指している）を天使らに召された（死んだ）人たち。天使らがこれに（汝らどのような状態であつたのか）とお訊ねになると答えて言う、（わしらは地上では、ひどくいためつけられておりました。）すると（天使らは）（だがアッラーの大地はあれほど広いものを、どこへでも居を移せばよかつたではないか）と言う。このような徒の行きつく先は、ジャンナム（ゲヘ

無関心につながっていく。これも世の中には多いと思います。

聖家族やガンジーがとつた姿勢は、悪行・不正に対して「反―抵抗」「反―敵対」するという能動的態度でした。相手の意図はもちろんよく理解しないとイケませんが、それに対して相手を懲らしめたいという自分の欲望と自分が戦うというのです。これが、エジプトのコプト教徒の基本的な姿勢でもあります。戦いではあります、精神的な武器をもつての抵抗です。

今後、平和の問題を考えると、キリスト・イエスあるいはムハンマドがとつた「避難」という姿勢が先ず重要なのではないでしょうか。これには逃避という意味ももちろんありますが、何もせずに、ただ逃げていったという意味ではありません。これは積極的な避難です。聖家族は3年にもわたつて避難を続けられました。ここには、これまで述べたような重要な意味があると思います。

(2013年6月8日、大学神学館3階礼拝堂にて)

聖家族のエジプト避難の旅とイスラムの聖遷を通して読み取れる、今日の重要課題とは何でしょうか。抵抗にはいろんな形があります。悪行・不正に対して抵抗・敵対する場合は、暴力に対しては同じ暴力を振るう、これは非常に低次元のやり方です。今でも世界中で行われていることです。結局、それでは世界は平和にはならないでしょう。

では、悪行・不正に対して受動的に抵抗・敵対する姿勢はどうでしょう。受動的に抵抗するというのは言葉として合理的ではありませんが、これは身をかわすという姿勢です。しかし、そこには自分のアイデンティティは無い。最終的には